

担当箇所：聖教全書 303 頁後 3 行から 305 頁 1 行、（論註ノート 46 頁 6 行から 48 頁 11 行）
内容は仏功德の八番目の【1】不虛作住持功德、【2】菩薩功德の始めの問答

○はじめに

昨年は、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂国」の「尽十方無碍光如来は、すなわち讃嘆門なり」のところを学んだ。この「尽十方無碍光如来」のはたらきの中で、そのはたらきを我が身に受けていくとはどういうことなのか。天親菩薩が「我依修多羅 眞実功德相 説願偈総持 与仏教相应」と示された願生偈の意を、曇鸞大師の論註の文を少しずつ読みながら一年間尋ねてきた。学びの報告をするほどの理解は得てないが、月に二回ある夜晃先生の「往生論註恩徳記」の読書会、またその学びを補うための「易行品・浄土論・往生論註ノート」（山口聖典研究会編）を読む読書会を通して、どのようなことを考えるようになってきているかをこの会で発表し、ご指導い頂きたいと思う。

如来（大いなるもの）を私達の認識の上に乗るように、体・相・用という概念を用いて考えることを教えられている。それにそって考えてみると、体（本体のこと、尽十方無碍光如来）、相（本来の性質、眞実功德相）、用（性質のもつはたらき、不虛作住持）と一応考えてみると、今回の私の範囲、不虛作住持功德それに続く菩薩功德は、尽十方無碍光如来が私達のうえではたらいっているすがた、用を顕していると考えられる。

『浄土論』の長行の始めに「この願偈は何の義をか明かす。かの安樂世界を觀じて、阿弥陀仏を見たてまつり、彼の国に生ぜんと願ずることを示現するがゆえに」とある。阿弥陀仏を見るとどうなるのかについては、後の不虛作住持功德の偈の後に、「即ち彼の仏を見たてまつれば、未証浄心の菩薩、畢竟じて平等法身を得証して、浄心の菩薩と上地の諸菩薩と畢竟じて同じく寂滅平等を得るが故に」とあり、この文章が大切な意味をもっていると考えられるが、これについては『論註』下巻で曇鸞大師が註釈しているので来年の範囲になるが、今回の学習と関連していると思い記しておく。

【1】不虛作住持功德について

『論註』の文

「觀仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」

此の四句は莊嚴不虛作住持功德成就と名づく

仏本何が故ぞ此の莊嚴を起したもう。

有る如来を見そなわすに、但声聞をもつて僧と為す。仏道を求むる者無し。

或いは仏に値いしかども、三塗を勉れざる有り。善星・提婆達多・居迦離等是れなり。

又人仏の名号を聞きて無上道心を発せども、惡の因縁に遇いて、退いて声聞・辟支仏地に入る者あり。是の如き等の空過の者、退没の者有り。^{学び2}

是の故に願じて言わく。「我れ成仏せん時、我れに値遇せん者、皆速疾に無上大宝を満足せしめん」と。

是の故に「觀仏本願力 遇無空過者 能令速滿足 功德大宝海」と言う。

住持の義は上の如し。 学び1

仏の莊嚴八種の功德を觀ずること、之上に訖りぬ。 （読みは、解説浄土論註より）

学び1. 「住持の義は上の如し」。この文に先ず着目した。この「如上」という表現は今までなかったもので、「もう一度見直せ」と曇鸞師からのメッセージと受け取り、「論註」の中で「住持」の語がどのように登場しているか調べてみた。色々あったが、この部分に直接関係するところは、国土功德の12番目の主功德の文に次のように出ていることを指している。

「住持」とは、黄鵠、子安を持てば、千齡更へりて起り、魚母、子を念持すれば、ガク 夏水ありて冬水なきをガクといふ を経て壊せざるがごとし。

今年のこの会で、この主功德を担当した島根班の岡本大志さんが、その資料の中（島根班資料6.7頁）に「住持」の語について考察を二つ書かれているので参考にさせてもらった。

下巻のほうでは『住』は「不異不滅に名づく」、『持』は「不散不失に名づく」と字の意味で「住持」の註釈をしているが、上巻では二つの喩で「住持」の意味を考えさせようとしている。

この文を夜晃先生の「往生論註恩徳記」では、以下のように書かれている。

「黄鵠持子安千齡更起」とは、此の故事、魏の文帝作と称せられる『列異伝』にありと書中明かす。黄鵠とは鶴、子安かつて鶴を助く。後、子安の死せし時、鶴悲しみて、その墓の上に来り、三年間鳴いて子安の名を呼び、子安を蘇生せしめ、同時に鶴は死せしと云う。

次の魚母の喩えは『智論三十七』に引く、

「空無相無作に入りて 仏念を以つての故に墮落せず 譬えば魚子の母 念ずれば則ち生を得、念ぜずば則ち壊するがごとし」

又、『七十九』に曰く

「菩薩 諸仏の念ずる所なくば則ち善根朽壊す 魚子、母の念なくば則ち壊爛して生ぜざるがごとし」

二つの喩えの中、

初喩（黄鵠のたとえ）は往相住持、後は還相住持

初喩は二乗の無上道心を起こす可と示して発するに比し、

後喩は菩薩三界雜生の中に生じて正覺華を動ぜしめざるに喩う。これ壊すべくして壊せざるに喩う

私案1

この喩が私に教えてくれることは、ざっくり表現すると初めの喩は死んでも甦るいのちがある。後の喩は、とても生きていけないような状況でも死なないいのちがある、もちろん生物学的に再生するとか死なないということではない。このように考えると、この喩の意味することを我が人生で具体的に考えることができて来る。

学び2. 所為の境について（有る如来を見そなわすに、～退没の者有り。）

ここには、三つの事が書かれている。

①但声聞をもつて僧と為す。 仏道を求むる者無し。

②仏に値いしかども、三塗を勉れざる有り。善星・提婆達多・居迦離^{注1}等これなり。

③人仏の名号を聞きて無上道心を発せども、悪の因縁に遇いて、退いて声聞・辟支仏地に入る者あり。

注1 善星（ぜんしょう） 真仏土巻（12/145）に出て来る。釈尊の子供。出家を許さなかったら王位を継いで、その力で仏法を壊すべし……と云われるような存在。

提婆達多（だいばだつた） 『観経』『涅槃経』等で説かれるようにアジャセをそそのかして父を殺させる。善導の観経疏の序分義の中に詳しくその内容が書かれていた。『論註』の中では上首功德の註釈の中にその名が出ている。

居迦離（くかり） 仏功德の主功德の中に取り上げられている。豊平班の資料参照のこと。

私案2

前に書いたように、「住持」の語を検討する中で、「論註」の中で最初に「住持」が出て来るのは、冒頭の難易二道釈の中、易行道の中に「仏力住持してすなわち大乘正定聚に入る。」とある。そこから目を転じてみるとその前に難行道の難について五つあげてある。その中、「二、声聞は自利にして大慈悲を障う、三、悪を顧みることなき人は他の勝徳を破す、四、顛倒の善果能く梵行を破る」とあるのが、前記の①から③にあたると考えられる。

そして、「是の如き等の空過の者、退没の者有り」とは、誰のことかと考えると、上巻の最後の八番問答の始めの問い「これは何等の衆生を共と指したもうや」に繋がってくる。その問答の中に登場する「誹謗正法の罪極めて重き」「愚痴の人すでに誹謗を生ず」「五逆罪の、正法なきより生ず」「正法を謗ずる人、その罪最も重し」これらの言葉が、善星・提婆達多・居迦離等のエピソードと重なってきて、唯除の機というのはいどこかにいる、誰かのことで済まされなくなってくる思いがした。第六問答が八番問答のピークだと思うが、そこに「仏力住持」を具体的に考える内容が示唆されているように思うが、担当班の発表を聞いてさらに考えたいと思う。

【2】菩薩功德の始めの問答については、「論註」の文を「往生論註恩徳記」でどのように読み説いているのかを対比して表にまとめた。

論註の文	往生論註恩徳記の解説
次に安樂国の諸の大菩薩の四種の莊嚴功德成就を觀ぜよ。 問うて曰わく。如来の莊嚴功德を觀するに、何の闕少せる所あつてか、復須く菩薩の功德を觀すべき耶。	この段は菩薩功德を觀する理由を明かす。問いの意はすでに仏功德莊嚴を觀察す。仏の莊嚴を觀ずれば足らざることは無かるべし。何故に菩薩功德を觀するやとなり。
答えて曰わく。 明君有すときには、則ち賢臣有るが如し。堯・舜の無為と稱せし、是れ其の比なり。	それに答えるに就いて、 初めは所觀の境体に就いて弁ずると云うは、 <u>仏には必ず菩薩を具すべきものなるを云う。</u> 仏よ

若し但如来法王有せども大菩薩の法臣無からしめば、道を翼讃するに於いて、豈満つと云わんに足らんや。	りすれば必ず菩薩のあること、明君には必ず賢臣あるが如くである。即ち堯に四岳、舜に五臣あつて天下治まる。「是れ其の比なり」とは合法なり。 次に反顕して但如来のみにして菩薩なくば仏徳も満足するとは云えないことを示す。即ち菩薩は仏を翼賛する。翼賛とはたすけほむること。たすけたすけること。今、論主は弥陀を翼賛せんとす。若し仏のみにして菩薩なくば論主仏を讃ずとも円満とは云われない。又、仏には翼賛の菩薩あつて仏徳は円満する。仏は必ず大方広なる果徳を有す。かかる仏徳は無量の内眷属あつて、因の万行の華を以て果の万徳を莊嚴する。今、仏徳中より生まれたる菩薩の因徳は仏を莊嚴し、翼賛する。その菩薩の徳を觀察することによって却て仏徳の円満を知るのである。(略) 『八十華嚴』卷四十三、又同卷四十六の文により (略) 自利の極まるところ仏と名け、利他の為に還相摂化の時を菩薩と名けるのである。(略) 弥陀の浄土にも亦無量の大菩薩あり。皆大涅槃を超証せるものであつて、利他の大因を発揮するが故に菩薩と云われている。ここにおいて菩薩の徳を觀察しなければ、仏徳の円満を知ることには出来ない。
亦、薪を積みて小なきときには、即ち火大きならざるが如し。	次に正しく菩薩の徳を明かすに就いて、初めに反喩を以てせられる。即ち、薪を積むことが少なれば火も亦随つて大ならず。大菩薩が多ければ、翼賛も亦大であることを顕す。
經に言うが如し阿弥陀仏国に無量無辺のもろもろの大菩薩あり。觀世音・大勢至等の如き、皆当に一生に他方に於て、次で仏処に補すべし。	故に、次に經を引いて弥陀仏国に大菩薩の多きを標せられる。即ち『大經』(1/45)「彼の国の菩薩、皆当に一生補処を究竟すべし。(乃至)二菩薩あり。最尊第一なり。威神の光明、普く三千大千世界を照らす。『小經』(3/4)「衆生生ずる者は皆是れ阿毘拔致なり。その中。多く一生

若し人、名を称して憶念する者、帰依する者、観察する者、法華經の普門品に説くがごとく、願として満てざること無し。 然るに、菩薩の功德を愛樂することは、海の流を吞んで止足の情無きが如し。	補処有り」と説かれるように弥陀仏国には無量無辺の大菩薩あり。観音、勢至の如し。 「皆当に一生に他方に於て、次で仏処に補すべし。」と自証の徳の一生補処なることが示されている。この「他方に於て、次で仏処に補す」については、浄土三部經にはその説はない。『悲華經』『觀音授記經』『平等覺經』『阿弥陀經』等の説によれば、二大士が弥陀入滅後、次第に仏処を補うとある。これは自国に於いてである。 しかるに今の如き説は『智度論』卷七にあり。經の「諸菩薩摩訶薩 皆是補処紹尊位者」について『智度論』には「問曰 若弥勒菩薩応称補処 諸余菩薩何以復言紹尊位者 答曰 是諸菩薩於十方仏土皆補仏処」とあり、今はこれによられたものである。 この文によって考えるに、弥陀仏国にあって菩薩たるものは、十方仏土にあっては仏と云われるべきものである。出でて仏たるもの、入っては菩薩である。弥陀に入滅なきが故に自国に於いて仏たるを要しないのである。そこで一生補処の徳を示さんとすれば「皆当に一生に他方に於て、次で仏処に補す」と顯すより外に表現の仕方はないであろう。大涅槃を証する限り仏であっても、弥陀の願力に帰する限り菩薩である。(略) 次に「若し人、名を称して憶念する者、帰依する者、観察する者、法華經の普門品に説くがごとく、願として満てざること無し。」は其の益他の徳を明かす。即ち「名を称して憶念する者、帰依する者、観察する者は『法華經普門品』に『觀音を念ずる者、願として満さざるなし』と説くが如し。即ち、觀音を称名憶念するものは七難を脱れ、三毒を離れ二求（求男、求女）を得て、所願満足す、と説く。今、これによって余を例す。 以上、菩薩を觀ずる所以を法体について示す。 「然るに、菩薩の功德を愛樂することは…」よ
---	--

亦、釈迦牟尼如来一目闍の比丘の吁（うれえ）て言すを聞こしめすが如し。誰か功德を愛して我が維針為らん、と。爾の時に、如来禪定從り起ち、其の所に來到して語りて言わく。我れ福德を愛す、遂に其れ維針と為らん、と。爾の時に、失明の比丘暗に仏語の声を聞きて、驚喜交わり集まりて、仏に白して言さく。世尊、世尊の功德は猶未だ満たずや、と。 仏報えて言わく。我が功德は円満せり。復須つべき所無し。但我が此の身は功德從り生ず。功德の恩分を知るが故に、是の故に愛すと言う、と。

問う所の如く、仏の功德を觀ずるに、実に願として充たざるは無し。
復諸の菩薩の功德を觀ずる所以は、上の如く種種の義有るが故ならくのみ。

り以下は能觀の行者に約して淨土の菩薩を觀察する由を示す。

「菩薩愛樂功德」等について

『智度論』十六に云く「一切賢聖より、下凡夫に至るまで 法を求むるに厭無し、海の流れを吞むが如し これを菩薩の心精進と為す」

又、ある經に云く「法を聴くに厭足無し 海の衆の流れを吞むが如し」。

「菩薩」とは能觀の人、即ち、願生の行者である。願生の行者は歸命の一念に「能令速満足」と上の偈に云うが如し。志願満足すれども満足に居らず。功德を愛樂してとどまるところなし。

次に例を挙げる。『智度論』十、及び同二十六にあり。十にこの因縁を語つて後に云く

「仏に白して言さく。仏の功德は已満てり。云何して福德を愛すと言うや。仏報えて言わく。我が功德已に満つと雖も、我深く功德の恩、功德の果報、功德の力を知る。我一切衆生中に於いて最第一を得しめん」

「一目闍比丘」とは阿那律尊者、天眼第一。阿那律の請いによつて世尊、針に糸を継ぎたまう。

「我が功德は円満せり。復須つべき所無し。但我が此の身は功德從り生ず」

念仏行者は名号大宝海より生ず。「功德の恩分を知るが故に、是の故に愛すと言う」功德より生まれたるものは功德の恩、功德の果報、功德の力を知る。故に仏さえ功德に厭足なし。念仏の行者も亦名号功德の恩を知り、功德の果報、功德の力を知る。故に知恩報徳の心限りなく、觀察門を展開して已に仏功德莊嚴を觀ずと雖も、更に厭足なく、菩薩莊嚴功德を觀ぜんとするのである。

答を結ぶ。觀仏功德に於いて願として満さざるなしと雖も、以上の如き理由によつて、菩薩功德を觀ずるのである。

私案 3

「論註」の中には、問答が29個あることは前回の学習で発表した。しかるべき箇所、しかるべき問答がなされているのだろう。今回のこの問答は、「君は、どこで無碍光如来のはたらきを受けているのか？」と私に問いかけてくれている。「ありがとうございます。申し訳ありません。がんばります。」の答えもその問いのなかに準備されていたように思う。

○おわりに

これからも、よき友と共に「往生論註恩徳記」の読書会を通して「論註」を学んでいきたい。

聖典に親しむ会（2025年5/23~25）

5月24日（金）割り当て山口班発表⑤

「不動而至」担当熊谷眞由美

安楽国清浄 安楽国は清浄にして

常転無垢輪 つねに無垢の輪を転ず

化仏菩薩日 化仏菩薩の日

如須弥住持 須弥の住持するがごとし

- ① 仏もと何がゆえぞこの莊嚴を起したもうと。ある仏土を見そなわすに、ただこれ小菩薩のみにして、十方世界においてひろく仏事を作すこと能わず。あるいはただ声聞・人・天の利するところ狭少なり。
- ② このゆえに願を興したもう。願わくは、わが国の中には無量の大菩薩衆あって、本処を動ぜずしてあまねく十方に至って種々に応化して、実の如く修行してつねに仏事を作さん。
- ③ 譬えば日、天上にあって、影、百川に現するがごとし。日あに来らんや、あに来らざらんや。
- ④ 『大集經』に言うがごとし。譬えば、人あって善く堤塘を治して、その所宜を量って水を放つ時におよんで、心力を加えざるがごとし。菩薩もまたかくのごとし。まず一切諸仏および衆生、供養に応じ、教化に応ずる種々の堤塘を治すれば、三昧に入るにおよんで、身心動ぜざれども、実の如く修行して、つねに仏事を作すと。
- ⑤ 実の如く修行してとは、つねに修行すと雖も、実に修行するところなきなり。このゆえに安楽国清浄 常転無垢輪 化仏菩薩日 如須弥住持 と言えりと。

『易行品・浄土論・往生論註ノート』48・49頁（山口聖典研究会編 永田文昌堂刊）

四種功德は「不虛作住持功德」より出でて、仏の功德のうち、とくに利他教化の功德を知らしめるために四種功德を取り上げそれを觀ぜよと述べている。『浄土論』は名前をたててない。それは「不虛作住持功德」に帰するからといわれている。

しかし、名がなくては不便なので第一は「不動遍至の徳」または「不動而至の徳」「不動応化の徳」等、その内容から名付けてある。（参1・2）

① 仏もと何がゆえぞこの莊嚴を起したもうと。ある仏土を見そなわすに、ただこれ小菩薩のみにして、十方世界においてひろく仏事を作すこと能わず。あるいはただ声聞・人・天の利するところ狭少なり。

「ある仏土」とはこれは諸仏の浄土。直接あげれば釈尊の浄土としての娑婆世界で、そこでは、

「ただこれ小菩薩のみにして、十方世界に於いて広く仏事を成すこと能わず」と。この土の菩薩は衆生を教化されるけれども、十方世界にゆきわたっての教化というものがなされない。仏事というのは、衆生を教化するところのはたらき。それが「ただ声聞・人天の利する所狭小」であると。つまり知らず知らず自己満足におちいり、自利独善に退転してしまう。これを「小菩薩」といい、六度の行を修する小乗の菩薩のこと。(参1・2)

「無垢の輪」というけれど、では「垢」とはなにか、二種の義があり「煩惱障」、それを断じたなら「声聞・阿羅漢」そしてそこに「法執」という法のとらわれがある。(参2)

② このゆえに願を興したもう。願わくは、わが国の中には無量の大菩薩衆あって、本処を動ぜずしてあまねく十方に至って種々に応化して、実の如く修行して常に仏事を作さん。

この故に願を興したもうとはどういう願かという、わが国の中にあつては、「本処」つまり阿弥陀仏の浄土を動かず不退転に(参2)、十方世界に至って、「種々に応化」する。衆生に応じて、「実の如く」教化する。つまり、真如のまま教化する。菩薩は自分の仏道を求めるだけが修行でなくて、利他教化が修行、この利他教化が真如の真理にかなった修行というふうにおのずからゆきわたるという意味。(参1)

「常に」というのは真如の徳であり、涅槃の徳であり、あの人この人と分別して教化することはできない。無分別に仏事をなすということ。(参2)

③ 譬えば日、天上にあつて、影、百川に現するがごとし。日あに來らんや、あに來らざらんや。

「影、百川現する」とは、水は昇らずして日輪と一つなる。日は來たらずして川と一つなる。『選択集』に「念仏の行、水月を感じて昇降を得たり」水は昇らずして昇る。日は降りずして降りる。ここに「感應道交」という意味があり、教化されるものと教化するものとの間に自らなる感應というものがなされるという意味でもある。(参2)

④ 『大集經』に言うがごとし。譬えば、人あつて善く堤塘を治して、その所宜を量って水を放つ時におよんで、心力を加えざるがごとし。菩薩もまたかくのごとし。まず一切諸仏および衆生、供養に応じ、教化に応ずる種々の堤塘を治すれば、三昧に入るにおよんで、身心動ぜざれども、実の如く修行して、つねに仏事を作すと。

「その所宜をはかりて」とは、川が氾濫するので堤防を作つて水を防ぐ。水の流れに応じて堤防を作るのであるから、水を放す時にはもはやなんら心を用いることがない。心を加えなくても、はからわなくてもいい。分別心を必要としない。(参2)

『大集經』第十一では菩薩のもとおこし給える誓願力にたとえる。菩薩誓願を發して我が修する所の善根を普く衆生に回向して無上菩提へいたらんと願い給う。その誓願力の堤さえ丈夫なら、それから修する所の善根功德は任運に衆生に回向することが出来るということころなり。(参1)

「種々の堤塘」とは、その本願を堤にたとえ、その自利利他の相は一色や二色ではない、種々のことがある。この本願力の堤さえ丈夫なれば、何時でも身も心も動ぜずして十方世界へ現われる。それを堤から水を放つと譬える。そのおもむきを「三昧に入るに及んで」という。この三昧は下巻の論註では報生三昧なり。また、第二十二願文に説いてある「諸仏を供養し衆生を済度したい」と自利利他を願う本願力を堤にたとえてある。(参1)

「身心不動」とは、菩薩の本心は浄土にありて、身も心も動じ給わぬこと。しかも十方世界に

応化身の化益を任運になし給う、これが即ち、報生三昧の力用なり。(参1)

⑤ 実の如く修行してとは、つねに修行すと雖も、実に修行するところなきなり。このゆえに
安楽国清淨 常転無垢輪 化仏菩薩日 如須弥住持 と言えりと。

「実の如く修行して、」これは同じく『浄土論』の言であるが讃嘆門の如実修行とは違い、この「如実修行」の言は『論註』下に釈があり、如実というは、実にかなうと云うこと。実にかなうと云うは実相の理にかなうということ。(参1・4)

浄土の菩薩は真如実相の理にかない普賢の自利利他の行を行ずるゆえに、つねに行ずれども行ずる相のない不行の行である。よって常に修行すると雖もと云う。(参1・3)

「化仏菩薩日如須弥住持と言えり」については下巻に「日というは未だ足らず」とあります。仏・菩薩を「日」に譬えただけでは十分ではないと。須弥山に居る者を中心にするなら、太陽が回っているように見えるけれども、太陽を中心に考えるなら、太陽において「須弥山の全体が明らかにされてくる」そういう意味で「また須弥を住持と言えりなり」と足しているのであると。(参5)

感想(熊谷)

加来雄之先生が教師会(2022年)のお講義で、「曇鸞大師が「他力」という言葉で押さえられた『浄土論註』、そのどの一字一句を読む場合にもそのことを忘れてはならない。」この言葉を思い出しながらいただきました。

また、今回のいただきました文献の中で「不動」ということを「不退転」という言葉でいただくお示しもありました。どうしたことなのかそのことにもっと注意していただきたいと思います。

※参考文献

参1『浄土論註講義』香月院深励著

参2『蓬茨祖運選集四』『浄土願生偈講話』蓬茨祖運著

参3『曇鸞教学の研究』幡谷明著

参4『願心莊嚴の世界』宮城顥著

参5『平野修選集三』平野修著

聖教全書 p 305 終わりから 5 行目～ p 306 初めから 3 行目

浄土論註学習ノート p 49 終わりから 1 行目～ p 51 初めから 4 行目

往生論註恩徳記四（住岡夜晃） p 26～ p 33

二、 一念遍至

無垢莊嚴光、一念及一時 普照諸仏会 利益諸群生

仏本なんがゆえぞこの莊嚴を起したまへる。

ある如来の眷属を見そなはすに、他方無量の諸仏を供養せんと欲し、あるいは無量の衆生を教化せんと欲するに、ここに没してかしこに出づ。南を先にして北を後にす。一念一時をもって光を放ちてあまねく照らし、あまねく十方世界に至りて衆生を教化することあたはず。出没前後の相あるがゆえなり。

このゆえに願を興したまへり。

「願はくはわが仏土のもろもろの大菩薩、一念の時のあひだにおいて、あまねく十方に至りて種々の仏事をなさん」と。

問ひていはく、上の章に、身は動揺せずしてあまねく十方に至るといふ。不動にして至る、あにこれ一時の義にあらずや。これといかんが差別する。

答へていはく、上にはただ不動にして至るといへども、あるいは前後あるべし。ここには無前無後という。これ差別となす。またこれ上の不動の義を成ずるなり。

もし一時ならずはすなはちこれ往来なり。もし往来あらずばすなはち不動にあらず。このゆえに上の不動の義を成ぜんためのゆえに、すべからく一時を觀ずべし。

無垢莊嚴光

無垢の智慧より放ちたもう光明によるがゆえに無垢莊嚴光という。

此の光明は即ち応化身の放つ所の光明なり（学習ノート p 108）

無垢光、則ち智慧。智慧のみが普遍の光。普遍広大の光でなければ無明の闇を照らす事はできない。無垢莊嚴光は応化身の光でありつつ、法身の光であり、浄土の光であろう。人生に輝く彼岸の徳を示されたものである。

一念及一時

「一念」は能応の心、「一時」は所応の時

一念と一時と能応所応の別あれども、意味は一つ。

時に前後なく、念に次第がなく、一念一時に照らす。それが無垢莊嚴の光である。

普照諸仏会 利益諸群生

この二句は所起の仏事である。即ち供養諸仏、開化衆生、上求菩提下化衆生。

無垢莊嚴の光を以て仏会を照らす。

智慧によって照らし出されたもの即ち仏会。智慧によって照らし出された仏会なるが故に、智慧は仏会に帰依供養する。その光はまた無明の闇にある衆生を開化して、淤泥華を開かしめる。かく開化されたる衆生はまた、同時に仏会の人となる。仏会を莊嚴するものは開化されたる衆生である。それゆえにこの二徳は一徳にすぎない。供養諸仏のない開化衆生はなく、開化衆生のないところに供養諸仏はない。自利即利他、利他即自利。

所簡の境

一念遍至に非ざる世界

「供養諸仏開化衆生」の仏事を成ぜんとするも「一念遍至」の徳なく、「此没彼出」「先南後北」して、一念一時に放光普照することができない。

出没前後は生死海の相。不動に非ざるがゆえに出没がある。出没有るがゆえに前後がある。

一念遍至に反す。

能為の願

「設い我仏を得んに、国中の菩薩、仏の神力を承て諸仏を供養し一食の頃に、無数無量那由他の諸仏の国に普く至らずば正覚を取らじ」この第23願は第22願から開かれたものである。この23願は供仏の願のみの如きも、意は上求には下化を具す。此の願一念遍至を誓われたものである。

我らはこの一念遍至の願によって、この世に於ける真実の仏事には、必ず浄土の大菩薩の一念遍至の徳の内在すべきことを知る。

問題の会通

答えに二義がある。

始めは差別を示す。

上の「不動而動」というのみでは「彼此出没前後なし」と断定できない。故に無前無後、一念遍至を顕す。

次に、後は上の不動而動の成就に約す。もし一時に非ずば彼此往来がある。往来あらば則ち不動の義は成就しない。故に一念遍至の徳が不動の義を成就する。

ここにも浄土の大菩薩の徳を思う。

疑問

1. 能応の心、所応の時とは 仏様の心が一念…ひとおもい 私達に応ずるのが一時、ひととき、同時、ということだろうか。
2. 諸仏の会を照らす、とはどういう事か。その事が供養諸仏。 そのことが開化衆生になるという。仏会、とは僧伽の事だろうか。私に直接働きかけても、私が働きを受け止めることができないので、僧伽を照らす、ということだろうか。

感想

菩薩の四種の正修行功德成就は、依報に在っては「如来浄華衆」、正報に在っては「天人不動衆」徳相に依れば、不虛作住持功德の別相。功德大宝海の別相（p 13）とあり、国土莊嚴、仏莊嚴、菩薩莊嚴というのはバラバラではなく、不虛作住持功德の別相、菩薩のはたらし、ということとで、私との関わりが身近になった。

無垢の光が一念及び一時、ひとおもい、同時に普く諸仏の会を照らす。そこに私達を照らす、はたらしかける、だからこそ私達の救いが成り立つ、そんな感じを受けました。

2025年度 「聖典に親しむ会」資料 山口班 発表4番目 竹重和典担当範囲

2025. 5. 22 版

1. 真宗聖教全書の担当箇所の記事（306頁の4行目～306頁終わりから2行目）

三、無想供養

雨天樂花衣妙香等供養讃諸仏功德无有分別心。

佛本何故起此莊嚴。見有佛土、菩薩・人・天志趣不廣不能遍至十方无窮世界供養諸仏如来大衆或以

己土穢濁不敢向詣浄郷或以所居清浄鄙薄穢土。以如此等種種局分、於諸佛如来所不能周遍供養發起廣大善根。是故願言。我成佛時、願我國土一切菩薩・聲聞・天人大衆、遍至十方一切諸佛大會處所、雨天樂・天花・天衣・天香、以巧妙弁辭供養讃嘆諸佛功德。雖嘆穢土如来大慈謙忍、不見佛土有雜穢相。雖嘆浄土如来无量莊嚴、不見佛土有清浄相。何以故、以諸法等故諸如来等。是故諸佛如来名為等覺。若於佛土起優劣心。假使供養如来非法供養也。是故言「雨天樂花衣妙香等供養讃諸佛功德无有分別心」。

2. 「易行品・浄土論・往生論註ノート」の担当箇所の記事

（往生論註卷上 觀察門 衆生世間 菩薩功德 51頁5行目～52頁9行目）

三、無想供養

雨天樂華衣 天の樂と華と衣と、
妙香等供養 妙香等を雨らして供養し、
讃諸仏功德 諸仏の功德を讃ずるに、
無有分別心 分別の心あることなし、と

仏もと何がゆえぞこの莊嚴を起こしたもうと。ある仏土を見ずに、菩薩・人・天、志趣ひろからず、あまねく十方無窮の世界に至って、諸仏如来大衆を供養すること能わず。あるいは、己れが土穢濁なるをもって、敢て淨郷に向詣せず。あるいは、所居の清淨なるをもって、穢土を鄙薄す。かくのごとき等の種々の局分をもって、諸仏如来の所において、周遍供養して広大の善根を発起すること能わず。

このゆえに願じて言わく、われ成仏せん時、願わくはわが国土の一切の菩薩・声聞・天人大衆、あまねく十方の一切諸仏の大会の処々に至って、天の樂・天の華・天の衣・天の香を雨らして、巧妙弁辞をもって、諸仏の功德を供養し讃嘆せん。穢土の如来の大慈謙忍を嘆ずと雖も、仏土に雑穢の相あることを見じ。淨土の如来の無量の莊嚴を嘆ずと雖も、仏土に清淨の相あることを見じ。

何をもつてのゆえに、諸法等しきをもつてのゆえに諸の如来等し。このゆえに諸仏如来を名づけて等覺となす。もし仏土において優劣の心を起さば、たとい如来を供養すれども、法の供養に非ざるなり。このゆえに雨天樂華衣、妙香等供養、讃諸仏功德、無有分別心と言えりと。

3. 主な言葉の意味（「易行品・淨土論・往生論註学習ノート」）

①鄙 ひな。1. 田舎（いなか）。郊外。城外の田野の地。「辺鄙」（へんび）

2. いやしい。いなかびている。みやびでない。「野鄙」

ところが狭い。家柄が低い、品性が低い。下品である。かたくな、頑固、とるに足らない、つまらない。おろかである。意識が低い。自分のことについて謙称「鄙見」「鄙言」

3. いやしめる、見さげる、また、いやしいとする。はずかしいと思う。

②無窮 無窮自在 思いのままになるさま。

4. 参考資料

1) 住岡夜晃先生の「往生論註恩徳記」を寺岡一途氏がまとめられている資料による

・文段大意

無分別心に依って作される供養諸仏の仏事を明かす。「行而不行」の正修行の相を顕されるのであるが「開化衆生」にも通ず。

(1) 雨天樂華衣 妙香等

釈では「天樂、天華、天衣、天香」と天を貫かしめてある。それよりすれば妙樂、妙華、妙衣、妙香と下の妙を上を貫くことも出来る。「天」は勝を顯し、「妙」は好なるを云う。（『大智度論』九に云く、『大經』云く、等の例をあげてある）

(2) 供養

「供養」について『大論』三十に云く 「供養の具に二種有り」一は財供養、二は法供養有り。

三行の供養あり。偈にあてはめてみると即ち

三業の供養 身業＝雨天樂華衣・・・財供養

妙香等供養

口業＝讃諸仏供養・・・法供養 二種供養

意業＝無有分別心

(註) 供養には法が入っていないくは供養にはならぬこと知るべし

(3) 讃諸仏功德

『大經』に云く「仏徳を歌歎し、經法を聴受す」と。今は歌歎仏徳に聴受經法を摂す。眞実の供養は三業供養にして、又二種供養である。

『智土論』三十に云く「菩薩の行に二種有り。一には諸仏を供養せんとし、二には衆生を度脱せんとす。供養諸仏を以て無量の福德を得る。この福德を以て衆生を利益す。所謂衆生の願を満す。コ客主、海に入り、宝を採り、安穩に出ずることを得、所親知識等を利益するが如し。菩薩是の如く諸仏法海に入り無量功德之宝を得て衆生を利益す。(後略)

(4) 無有分別心

『智度論』三十に云く「分別心とは所得の心あり。相を取りて是非好惡を生ずる也」

これは上の虚空無分別心と同じく差別の念のないことである。下の(註)の如し。

(註) 私には日本語が無所得なのである。外国語を習っても有所得である。日本語は生まれから薫習されて身につけているから計らわずして伝えるがごとし。

2) 「易行品・浄土論・往生論註ノート」の巻下の109頁の7行目からの「無相供養」を解釈した文章によると

三には、かれ一切世界において余なく、諸仏の会を照らす。大衆余なく広大無量にして諸仏如来の功德を、供養し恭敬し讃嘆す。偈に

「雨天楽華衣 天の楽と華と衣と、
妙香等供養 妙香等を雨らして供養し、
讃諸仏功德 諸仏の功德を讃ずるに、
無有分別心 分別の心あることなし。
と言えるがゆえに、と。」

あり、続けて

「無余というは、明らかにあまねく一切世界の一切諸仏の大会に至って、一世界にも一仏会にも、至らざることあることなきなり。肇公の言わく「法身は像なくして形を殊にす。ならびに至韻に応ず。言なくして玄籍広く布けり。冥権、謀なくして、動じて事と会す」けだしこの意なり。」ある。

無余 むよ - ねはん【無余涅槃】. の解説. 仏語。煩惱を断ち、分別を離れ、肉体をも滅しつくした悟りの境地。生存の根源を残さない境地。⇔有余(うよ)涅槃。

肇公 僧肇は、鳩摩羅什に師事し31歳で夭逝した天才仏教僧であった。解空第一と称され、竜樹の空の思想を中国で初めて老荘の格義を超えて理解したといわれる。

至韻 いいん. 至極の韻(ひびき)。説法の声。(証巻 P.320). すぐれた音声。仏の説法の声。(論註 P.138). 出典(教学伝道研究センター編『浄土真宗聖典』

玄籍 げんせき．深遠な意義をもつ典籍。仏典を指す。(証巻 P. 320, 化巻 P. 418)．出典
(教学伝道研究センター編『浄土真宗聖典(注釈版)第二版』本願寺出版

冥権 冥権（みょうごん）とは、はかりしれない衆生を救う力、つまり仏教における冥土
の権威のことです。具体的には、浄土真宗において、阿弥陀如来の深い慈悲による
救済の働きを指します。冥権は、衆生の苦しみや煩悩を救い、浄土へと導く力とし
て理解されています。

(以上の5項目はネットで検索したもの)

5. 疑問点と感想

1) 「易行品・・・ノート」の文章が分かり易いと思うので主にこの文章を読んだ感想。

① この箇所をなぜ「無相供養」名づけるのか？

本文の「仏土に雑穢の相あることを見じ。浄土の如来の無量の莊嚴を嘆ずと雖も、
仏土に清浄の相あることを見じ。」からきていると思われるが「無い」のではなく
「見ない」というのが正しいのではないか？もう少し適当な名前があるのではない
か。

以上

1 論註とは何か

○無上仏道(自利利他・往還の道)の成就とその方法論としての本願力回向が説かれる

○願生偈 我一心

↓

礼拝門

讚嘆門

作願門

觀察門

回向門

入(自利)

出(利他)

「願生偈」は天親の本願成就文

○国土莊嚴17種・・・1～16 自利

17 一切所求満足功德 利他

「衆生の願樂するところ 一切能く満足す」浄土論

「このゆえに願じて言わく。わが国土はおのの所求に称いて、情願を満足せしめんと。」

↓ 願樂・情願とは

卷上の一切所求満足功德

「これいかんが不思議なるや。彼の国の^{しよしゆ}人天、もし他方世界の無量の仏刹に往きて、諸仏・菩薩を供養せんと欲願せん。および所須(そのために必要な)の供養の具、願に称^{かな}わざることなけん。またかしこの寿命を捨てて、余国に向かい生じて、脩短自在ならんと欲わん。願に随いてみな得。未だ自在の位に^{かな}階^かわずして(未証浄心の菩薩)、自在の用におなじからん(浄心の菩薩・上地の菩薩と同じ)。焉んぞ思議すべきや。」

卷下の一切所求満足功德

↓

※15願・22願(還相回向の願)・23願・24願と関係

・15願 眷属長寿の願

「たとい我、仏を得んに、国の中の人天、寿命能く限量なけん。その本願、修(長)短自在ならんをば除く。もし爾らずんば、正覚を取らじ。」

・22願 一生補処の願・必至補処の願・還相回向の願

「たとい我、仏を得んに、他方の仏土の諸の菩薩衆、我が国に來生して、究竟して必ず補処に至らん(等正覚・菩薩の最上の位・弥勒と同じ)。その本願の自在の所化(自在に衆生を教化したいと)、衆生のためのゆえに、弘誓(本願力に乗ずる)の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊んで、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恆沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立てしめんをば除かん。常倫(世間的な十地の階段を一段一段上る考え)に超出し、諸地の行(十地の菩薩が行う自利利他の修行)現前し、普賢(還相回向)の徳を修習せん。もし爾らずんば、正覚を取らじ。」

・23願 供養諸仏の願

「たとい我、仏を得んに、国の中の菩薩、仏の神力を承けて、諸仏を供養し、一食の頃に遍く無数無量那由他の諸仏の国に至ること能わずんば、正覚を取らじ。」

・24願 供具如意の願

「たとい我、仏を得んに、国の中の菩薩、諸仏の前にありて、その徳本を現じ、もろもろ

の欲求せんところの**供養の具**、もし意のごとくならずんば、正覺を取らじ。」

↓

※不虛作住持功德・菩薩四種正修行へと展開

※さらに全体的に明らかにしたのが出第五功德門

○仏莊嚴8種・・・1～7 自利

8 不虛作住持功德 利他

「すなわち彼の仏を見れば(阿弥陀如来の本願力に遇う)、未証淨心の菩薩、畢竟じて平等法身を得証して、淨心の菩薩と上地の諸の菩薩と、畢竟じて同じたてく寂滅平等の法(無分別智・作心を離れた智)を得しむるがゆえなり。

平等法身とは、八地已上の法性生身(法性の悟りを得ているが、衆生教化の利他行のためにあえて生死の身を保つ)の菩薩なり。寂滅平等とは、即ち此の法身の菩薩の所証の寂滅平等の法なり。此の寂滅平等の法を得るを以ての故に、名づけて平等法身と為す。

この菩薩、報生三昧を得て、三昧の神力を以て能く一處にして、一念一時に十方世界に遍じて、種々に一切諸仏及び諸仏の大会衆海を供養し、能く無量世界の**ましま**無さぬ處において種々に示現し、種々に一切衆生を教化し度脱して、常に仏事を作せども初めより往來の想・供養の想・度脱の想なし。」卷下の不虛作住持功德

↓

※未証淨心の菩薩が本願力回向によって、還相の菩薩として展開

↓

○菩薩莊嚴4種・・・1～3 有仏の国 自利

4 無仏の国 利他

「四には、かれ十方一切の世界に、三宝**ましま**無さぬ處において、仏法僧宝の功德の大海に住持し莊嚴して、遍く示して、如実の修行を解らしむ。」淨土論

↓

○この利他を五念門でいえば・・・回向門

「いかに回向する、一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願す。回向を首となして大悲心を成就することを得たまえるがゆえにと。」淨土論の回向門

「**還相**とは、彼の土に生じ已って、奢摩他・毘婆舍那、方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、ともに仏道に向かえしむるなり。」論註卷下回向門

「出第五門**というは**、大慈悲をもって一切苦悩の衆生を觀察して、**応化身を示て**、生死の園、煩惱の林の中に回入して、神通に遊戲し教化地に至る。本願力の回向をもつてのゆえに、これを出第五門と名づく。」淨土論出第五門

2 菩薩の理解

(1)延塚先生

- ・天親・・・自らが作心を超えて菩薩となる・・・大乘菩薩道の成就
- ・曇鸞・・・凡夫の仏道・・・自らは菩薩とは言えない
 - ・曇鸞が大菩薩というのは、龍樹・天親(応化身・諸仏善知識)
- ・親鸞・・・法蔵菩薩・・・善知識を善知識たらしめている根源力

・善知識の上に法蔵菩薩の現行を仰ぐ

「往相回向は、私のいのちの深いところから法蔵菩薩が名告りをあげて、大經こそ真実の教えであり、南無阿弥陀仏という念仏申す信心が発り、そして浄土こそ一切衆生の根拠である。このように教行信証というものを往相回向に頂く。そして還相回向は、「親鸞におきては、よき人のおおせをかぶりて」という「よき人」を浄土から還って来た諸菩薩と仰ぐ。これが親鸞の二種回向の領解です。大經自体がそうになっています。」

(2)夜晃先生 「柔軟心」(住岡夜晃全集15巻)

①願生行者を指す

「願生の行者という所以は、浄土論の文の当面は、徹頭徹尾、願生の行者たる天親菩薩が一心に帰命しつつ、次第に、礼拝、讃嘆、作願、観察、回向と、一心五念の相を展開しつつ、自利利他成就する相を願生の歌として説かれたものであった。されば菩薩とは、願生の行者である。」

②還相の菩薩を指す

「次に、還相の菩薩とせられることは、宗祖が、それを教行信証の証巻において還相回向篇に、この文を引用せられたが為である。(略)還相の菩薩と雖も、それは、唯単に、理想界に架空せられたる人ではなくて、我等の現実界に來たつて、一切衆生を導きつつ、衆生と共に安樂の國に願生する人である。されば、還相の菩薩と雖も、具体的には、願生の行者として、一心帰命、普共諸衆生願生安樂國と、願生の一道を歩むより外にはないであろう。宗祖聖人は、還相摂化の方便を大聖は勿論、七祖の上に、王舎城の所縁の上に拝された。自らを引導して念仏の法門に入らしむる順逆二縁全ての上に、浄土より生死海への還相摂化の方便相を味はれた。されば、往相位に立って念仏する者が、我が前に立って、我を導く現実の教主全知識の上に、還相の意味を拝むのである。我等が、往相回向の生活にありつつ、還相の徳を説ける教の意味を領解することが出来るのは、我にせまる教主聖人の上に、還相の徳を拝むことができるが故である。されば、論註の文は、これらの人の内生活を開顯せられたものともとることが出来るのである。されば、同一の文が、往相の行者ともとられ、還相の菩薩とも解せられる内面的交渉を知ることが出来るのである。」

③法蔵菩薩を指す

「然るに眼を一転して、菩薩の利他大悲の根本を求むれば、そこに法蔵菩薩を発見するのである。止観相順して五念門の行を修し、広大なる三嚴二十九種の浄土を建立するものは法蔵菩薩である。この大慈悲によりて成就せられたる真実報土より衆生救済の実現せれるもの即ち回向である。還相の菩薩と雖も、この大悲の本源より生起するものである。法蔵菩薩の因果なくしては、往還二回向の菩薩の全てはあり得ないのである。この意よりすれば、全文悉く法蔵菩薩の発心修行の因果を説けるものととられるのである。」

3 菩薩莊嚴の4 「示法如仏」

原文	意訳
①「何等の世界にか、仏法功德の宝無さぬ。われ願はくはみな往生して、仏法を示すこと仏のごとくせん」と。	
②仏もと何が故ぞ此の願を起こしたもう。	②仏はもと、どうしてこの願いを起こされたのであ

有る軟心の菩薩を見そなわずに、ただ有 仏の国土の修行を楽って、慈悲堅牢の心 無し。	ろうか。ある意志の弱い菩薩を見られると、ただ仏 がまします国土で修行することばかり楽って、(無 仏の国に仏道をおこそうとするような)堅い慈悲の 心がない。
③この故に願を興したまえり。願わくは、 我れ成仏せん時、我が土の菩薩は皆慈 悲勇猛堅固にして、志願して能く清浄の 土を捨て、他方の仏法僧無さぬ処に至り て、仏法僧宝を住持し莊嚴して、示すこと 仏が有すが如くして、仏種をして處處に 断たざらしめん(仏法の種を至る所にまい て絶やさないようにしよう)、と。	③だからこの願いを興された。私が仏に成るとき は、我が国土に生まれた菩薩は皆、慈悲の心が 勇猛で堅く壊れることなく、自ら願って清浄の国土 を捨てて、他方国土の仏法僧ましまさぬ処に至っ て、仏法僧の三宝を永遠にたもって失わしめずに 莊嚴して、それを人々に示すこと、あたかも仏がま しますがごとくにして、仏法の種をいたるところにま いて絶やさないようにしよう、と願われたのである。
④この故に、「何等世界無 仏法功德宝 我願皆往生 示仏法如仏」と言えり。	④だから、「「何等の世界にか、仏法功德の宝無さ ぬ。われ願はくはみな往生して、仏法を示すこと仏 のごとくせん」とのたもうのである。
⑤菩薩の四種莊嚴功德成就を觀ずること、これ上に訖んぬ。」	⑤菩薩の四種の莊嚴の功德が全うしたことを觀ず ることは、以上でおわった。

(1)往生について 「われ願はくはみな往生して」

○往生…浄土への往生…往相

無三法の所への往生…還相



本願を背負って立つ大菩薩(応化身)

(2) 曇鸞大師の問題意識

○巻下の「示法如仏」

「上の三句は遍至(あまねく至る)と言うと雖も皆是れ有仏の国土なり。若し此の句無くば、
便ち是れ法身、所として法ならざること有らん(法身なのに法がはたらかない所がある)。
上善、所として善ならざること有らん(この上ない善・手立てといえども、その善が善とならな
い所がある)。」

・不動遍至	}	有仏の国土(有三法の処)
・一念遍至		
・無相供養		
・示法如仏	}	無仏の国土(無三法の処)



※曇鸞大師の問題意識

- ・時の自覚…二道釈「五濁の世、無仏の時において阿毘跋致を求むる」
- ・機の自覚…八番問答「一切外道凡夫人」「下品の凡夫」

【五濁の世、無仏の時において、下品の凡夫がいかにして、自利(往相)利他(還相)の無
上仏道を成就することができるのか。】

↓本願力

「本願力というは、大菩薩は法身の中に於いて常に三昧(報生三昧)に在して、種々の

身・種々の神通・種々の説法を現ずる事を示す、皆本願力をもって起こすなり。譬えば阿修羅の琴の鼓する者無しと雖も、音曲自然なるが如し。」利行満足章の出第五門

○阿弥陀の本願力(不虛作住持功德)によって

↓

・大菩薩(応化身・・・曇鸞にとっては龍樹天親)は報生三昧を得る

・報生三昧・・・作心を離れた任運無功用の衆生教化・・・遊戯の如くの衆生教化

「示応化身^{はば}というは、法華經の普門示現の類のごとし。遊戯に二の義あり。一は自在の義。菩薩、衆生を度することは、譬えば獅子の鹿を捕つに、所為難からざるがごとし、遊戯の如し。二は度無所度(度しても度した思いがない)の義なり。菩薩、衆生は畢竟じて所有(実体)なしと観じて、無量の衆生を度すと雖も、実は一衆生として滅度を得る者無し(実体的に度して滅度を得た衆生はひとつも菩薩の思いとしてはない)。度衆生(衆生を度す)を示すこと遊戯の如し。」利行満足章の出第五門

(3) 安田先生の領解

○菩薩功德の第四の示法如仏は三法無き世界への応化

「三宝がないといった言葉には責任がある。ないときには、あらしめねばならぬ責任がある。無仏の世界に生まれなければならないという責任がある。そこで第三までは喜んで死ぬということをしたが、今度は死んでおれぬ。生きなければならぬというのが第四である。」

・主観的自己を超えた自己・・・本願という自分を縛る自己が生まれる

(仏道の我・仏道で縛られた我)

↓

「夫れ菩薩は仏に歸す、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜己に非ず、出沒必ず恩を知って徳に報ずるに由るが如し。」・・・使命に生きる

○「第四の功德は、三嚴功德莊嚴の歸結」

3 回向門

原文	意訳
①次に、下の四句は是れ回向門なり。	①次に、下の四句は回向門である。
②我論を作り偈を説きて、願わくは弥陀仏を見たてまつり、あまねく諸の衆生とともに、安樂国に往生せん、と。	②我論を作り偈を説きて、願わくは弥陀仏を見たてまつり、あまねく諸の衆生とともに、安樂国に往生せん
③この四句はこれ論主の回向門なり。	③この四句は、論主(天親菩薩)自らの回向門である。
④回向とは己が功德を回して、あまねく衆生に施して、ともに阿弥陀如来の見たてまつり、安樂国に生ぜんとなり。	④回向とは、自らが積んだ功德をめぐらして、ひろく生きとし生けるものに施し、ともに阿弥陀如来を見たてまつり、安樂国に生まれようということである。
⑤無量寿修多羅の章句、われ偈頌をもって総じて説き竟ぬ。」	⑤無量寿修多羅の章句を、わたしは偈頌をもってすべて説きおわった。

(1) 延塚先生の領解

「この四句はこれ論主の回向門なり。回向とは己が功德を回して、あまねく衆生に施して、ともに阿弥陀如来を見たてまつり、安樂国に生ぜんとなり。」

○曇鸞は天親を善知識として見ている

「天親は不虛作住持功德によって自利利他成就し、浄土に生まれて還相の菩薩と成って、己の功德を回向して下さった。」

(2)安田先生の領解

○曇鸞の問題意識・・・「衆生」へと展開

↓

「本願に目覚めた・照らされた我とはどのような分際・位置の我か」・・・八番問答へ